



原板：湿板・鶏卵紙、192×236mm

所蔵：日本カメラ博物館

日本カメラ博物館の承諾を得て、『よみがえる幕末・明治 大君の使節たち』(JCII フォトサロン発行、2002)より転載

松平康直（康英）肖像写真

この写真は、文久2年（1862）の遣欧使節団に副使として同行した松平石見守康直（1831～1904）の写真です。松平康直は、松平周防守家の分家平福領松平家（旗本、5000石）に生まれましたが、元治元年（1864）11月に本家である松平周防守家を相続し、陸奥棚倉藩6万442石の藩主となりました。藩主就任後の元治2年（4月に改元し慶応元年）1月には周防守に任官し、名を康英と改めました。康英はその後慶応2年10月に川越に転封し、最後の川越藩政を担いました。

文久2年の遣欧使節団の目的は、安政5年（1858）に五か国と結んだ修好通商条約に規定された江戸・大坂の開市及び兵庫・新潟の開港を目前に控え、国内情勢の不安定化からその延期を各国に要請することにあります。また併せて西欧諸国の情報収集も

その使命としていました。使節団の構成は、正使竹内下野守保徳（勘定奉行兼外国奉行）、副使松平石見守康直（神奈川奉行兼外国奉行）、監察使京極能登守高朗（目付、外国係）の三使を中心に38名（ロンドンでの合流者を含む）で編成されていました。一行は文久元年12月23日（陽暦1862.1.22）に品川を出発し、香港・セイロンを經由してスエズ地峡を汽車で横断し、地中海のマルセーユからパリに入り、その後イギリスに渡り、オランダ・プロシア・ロシア・ポルトガルの各国に立ち寄り、文久2年12月10日（1863.1.29）に帰国しました。

使節団一行の写真は、「石黒敬七コレクション」等で知られていますが、最近では、「東京大学史料編纂所附属画像資料解析センター通信」で、オランダ王室史料館所蔵竹内使節団コレクションが紹介されています。

上掲の写真は、フランス人写真家フェリックス・ナダール（1820～1910）が撮影したもので、写真右下にナダールの赤サインがあります。松平康直の家来として同行した市川渡（1824～？）の見聞録『尾蠅欧行漫録』（『遣外使節日記纂輯』第2巻所収）には、パリ到着後の3月15日の条に「写影師来リテ御三使及属官数輩ノ真影ヲ照写シタリ」とあり、また同月24日にも「御三使写影家ニ行カレ」とあります。この写影師とは写真家のナダールのことと考えられます。また24日の「写影家」とはナダールの写真館のことでしょうか。写真に写った康直の理知的な風貌は、良家の出身を感じさせるものです。

松平大和守家文庫「御在城中年中行事」(上・下)の紹介

1. はじめに

近年江戸幕府における年中行事を中心とした儀礼研究が盛んに行われ、目覚ましい成果が報告されています。3代将軍徳川家光時代に確立された各儀礼は、幕府の諸制度の整備と結びつきながら、武家社会の身分秩序維持のために大きな役割を果たしていたことが指摘されています。

このように武家の年中行事は、武家社会を支える重要な要素であったといえます。但し現代の研究は、江戸城中における行事が中心となっています。藩主は参勤交代によって、江戸と国元で生活しています。そのため国元で行われる年中行事と、幕府による年中行事との関連性をみていくことも大切なことと考えられます。

今回収蔵資料を整理している中で、川越藩主の年中行事に関する記録を改めて確認しましたので、上記の視点に基づきながら、松平大和守家文庫「御在城中年中行事」の紹介を行います。

2. 松平大和守家文庫の概要

本史料を含む松平大和守家文庫は、旧川越藩主松平大和守家に伝来した史料です。昭和9年に、松平大和守家15代当主である松平直富氏から川越市に寄託されました。その後、直富氏の嫡子直正氏から譲渡の申し出があったため、平成9年に博物館と図書館で分割して購入しました。総数1024点で、博物館で購入した分は、565点(内訳80種-439冊・121枚・5通)です。

松平大和守家は、徳川家康の次男秀康の5男直基を祖とする御家門(徳川家の一族)です。5代朝矩が明和4年(1767)に前橋から川越に転封し、以後11代直克の慶応2年(1866)までの約100年間川越藩主を勤めました。

文庫の内容は、川越藩時代の事務記録類や家臣分限帳等の藩政史料関係、系譜や秘蔵什物目録等の家の由緒に関係する史料、「川越版日本外史」等の典籍類に大別されます。

今回紹介する「御在城中年中行事」は、藩政関係史料に該当します。

3. 「御在城中年中行事」の概要

(1) 形状等

本史料は冊子本で、「上」・「下」2冊からなっています。縦320mm×横235mmで、「上」は「下」の凡そ2倍程の厚さがあります。青表紙に題箋が貼られ、それに「御在城中年中行事上」・「御在城中年中行事下」と墨書されています。本紙は楮紙です。本史料は、筆跡から少なくとも3人の寄合書と考えられます。ま

た、「下」の「当時」で始まる奥書は、本文とはまったく異なる筆跡です。2冊とも全体的に保存状態はあまりよくなく、虫損がやや激しい状態となっています。

(2) 成立過程等

「下」の奥書から、本史料の成立過程等が知られます。そこ(奥書1・奥書2・解説文)から読み取れる大意をまとめると、次のようになります。

・本史料には原本が存在していたこと。

原本

成立年代 明和6年(1769)4月頃。

その後、弘化3年(1846)の川越城火災によって焼失。ここから、川越城に保管されていたことがわかる。

作者 都築政弘を選者とし、その他7名。

(都築氏は、寛永12年{1635}に大和守家初代直基付となった古参の家臣・禄高150石・寄合)

内容 藩主が在国中に行う1年分の行事をまとめたもの。(年中行事が中心)

作成理由 幼君、松平大和守家6代直恒(1762~1810)の川越初入城に備え、直恒の在国中における手本(手引書)とするため。

※直恒の初入城は、明和7年(1770)4月

・本史料は写本であること。

成立年代 弘化3年(1846)以降

作者 不明

成立経緯 原本が弘化3年の川越城火災で焼失したため、江戸藩邸に存在していた写本を写して作成された。

・その他 本史料の他に、「御参府御帰城取扱帳」2冊・「御家中取扱帳」4冊・「神仏取扱帳」1冊・「不時御用取扱帳」3冊があり、都合12冊が作成された。

このように本史料は、原本が成立してから約80年後の幕末に作成されたものであることがわかります。

(3) 内容

本史料は、藩主が在国中の1年分の年中行事を、月日順にまとめたものです。正月元日から6月晦日までの分を「上」に記し、7月朔日から12月晦日までの分を「下」に記しています。

書き出しは、「年中行事上 目録」で始まっています。以下本文は、「一元日御祝式并御礼之事(以下

略)」のように、月日・行事の内容がひとつ書きで記されています。

本史料に記された主な行事を、正月から順にまとめると次のようになります

月 日	内 容
正月 元日	・福寿草、蓬萊を召す ・老中、年寄、奏者番、番頭、大目付、諸奉行、物頭、組頭、御膳番、御使番、御目付組、御側坊主、儒者、医師正月参賀
2 日	・元日に参賀しなかった藩士の正月参賀、例えば老中の嫡子等 ・上職人（御用職人カ）正月参賀 ・縫初め、掃初め、馬召初め ・孝顕寺〔注1〕へ年賀の名代派遣
3 日	・寺社四ヶ所へ参詣 ・謡初 ・孝顕寺へ名代派遣
4 日	・老中、城代、年寄役の隠居、与力正月参賀 ・朝膳一汁五菜召す 夜は平日の通り ・森岩寺〔注2〕へ名代派遣
5 日	・孝顕寺、森岩寺、永寿寺〔注3〕、隆勝寺〔注4〕正月参賀 ・日光門主へ年賀の飛脚派遣
6 日	・料理初め ・町年寄、町名主、郷分名主、御用商人正月参賀 ・水祝風呂焼初め、十種香会、船乗初め
7 日	・惣御目見 ・七種粥を召す（七草の節句）
8 日	・郷分御用商人正月参賀
9 日	・町在寺社、山伏正月参賀
11 日	・具足、陣太鼓、法螺貝、旗、馬印等の飾り、東照宮札、具足の備餅、神酒頂戴 ・老中、備餅、神酒頂戴 老中から奏者番まで盃頂戴 ・射初め、御用初め、会所初め、諸稽古初め（弓場始）
12 日	・平日出仕開始
15 日	・式日 ・孝顕寺参詣 ・左義長上覧
17 日	・大興寺参詣〔注5〕
20 日	・孝顕寺参詣
21 日	・森岩寺参詣
23 日	・孝顕寺参詣
24 日	・森岩寺参詣
25 日	・天満宮参詣
26 日	・孝顕寺参詣
28 日	・長壁社参詣
2 月 朔日	・惣御目見 15日以降は、正月と同じ行事となる
3 月 朔日	・惣御目見
2 日	・姫様雛遊びの祝に付き、鮮魚献上
3 日	・式日（上巳の節句） ・老中御礼 15日以降は、正月と同行事となる
4 月 朔日	・惣御目見 ・衣更 15日以降は、正月と同行事となる

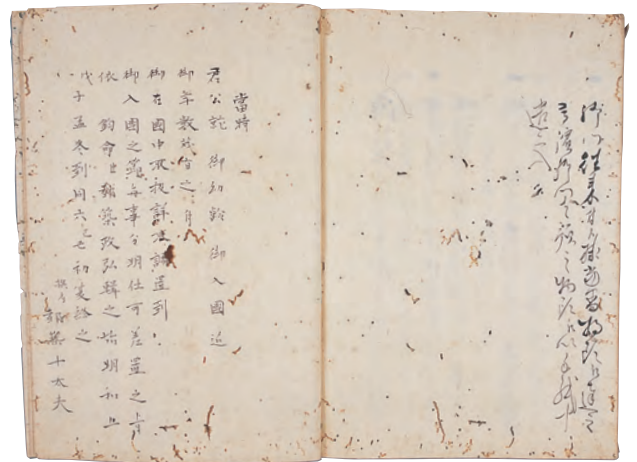
5 月 朔日	・惣御目見
4 日	・若殿様 幟 拜見
5 日	・式日（端午の節句） ・老中御礼 15日以降は、正月と同行事となる
6 月 朔日	・惣御目見
2 日	・武具蔵等の土用干し ・土用入りの際、拜見
16 日	・嘉祥に付き、菓子を召す（嘉祥の節句）
17 日	・孝顕寺、大興寺参詣 この日以降は、正月と同行事なる
7 月 朔日	・惣御目見
7 日	・式日（七夕の節句） ・惣御目見、着服
13 日	・盆中に付き、孝顕寺、森岩寺、永寿寺に備物献上
14 日	・孝顕寺参詣
15 日	・式日 ・孝顕寺、森岩寺参詣 この日以降は、正月と同行事となる その他
28 日	・夏の口切茶会
8 月 朔日	・式日
12 日	・惣御目見、着服
14 日	・森岩寺参詣 ・孝顕寺参詣 この日以降は、正月と同行事となる
9 月 朔日	・惣御目見、着服
9 日	・衣更
9 日	・式日 ・重陽の祝儀（重陽の節句）
12 日	・森岩寺参詣
13 日	・月見の宴 この日以降は、正月と同行事となる その他
晦日	・大神送り
10 月 朔日	・惣御目見
12 日	・玄猪（10月初亥の日）の祝儀（玄猪の節句） ・森岩寺参詣 この日以降は、正月と同行事となる その他
18 日	・口切茶会
晦日	・大神送り
11 月 朔日	・惣御目見
12 日	・冬至に入り、小豆粥を召す ・森岩寺参詣 この日以降は、正月と同行事となる
12 月 朔日	・惣御目見
2 日	・寒入りで、小豆餅を召す
3 日	・老中、寒入りの御礼
12 日	・森岩寺参詣
13 日	・煤払い この日以降は、正月と同行事となる その他
25 日	・餅春きの儀に付き、小豆餅を召す
27 日	・年忘の祝儀に付き、式汁五菜を召す
	・風呂納め
28 日	・歳暮の祝儀
29 日	・節分 ・神楽上覧
晦日	・立春に付き、餅を召す ・老中、歳暮の祝儀の御礼 ・年始規式帳拜見 ・夕御膳祝儀に付き、雑煮を召す ・神楽上覧



(表紙)



(奥書 2)



(奥書 1)

奥書解読文

当時

君公就 御幼齡 御入国迄

御年数茂有之ニ付

御在國中取扱詳取調置到

御入国

之節毎時分明仕可差置之旨依

鈞命臣都築政弘輯之始明和五戊子孟冬到同六己丑初夏終之

撰者

都築十太夫

御用掛頭取

小野寺治太夫

御用掛

林 清八

執事

飯田丈内

執事加勢

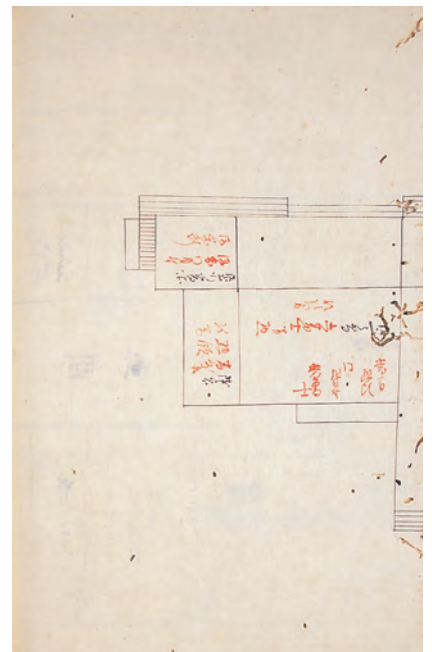
有野恵助

中野利左衛門

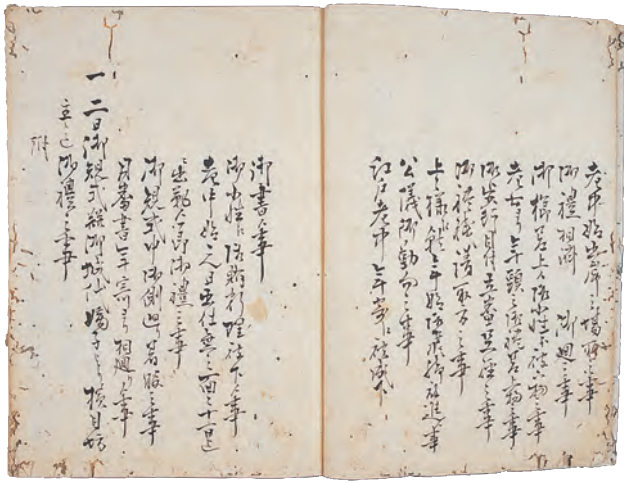
武田惣右衛門

中村嘉内

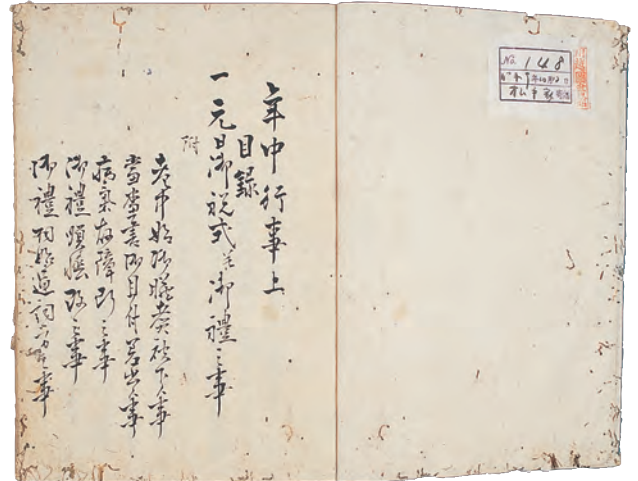
所謂御調帳者御參府御歸城取扱帳二冊御家中取扱帳四冊神仏取扱一冊不時御用取扱三冊年中行事二冊凡十二冊都築政弘之功余真ニ当役之規簿也可惜弘化丙午ノ災ニ羅滅テ為灰矣幸哉一部分テ有江戸衛宇テ存ス故得写之而テ一日不可無此簿故欲速成之写ニ以草又后日必欲命書役使謹書云



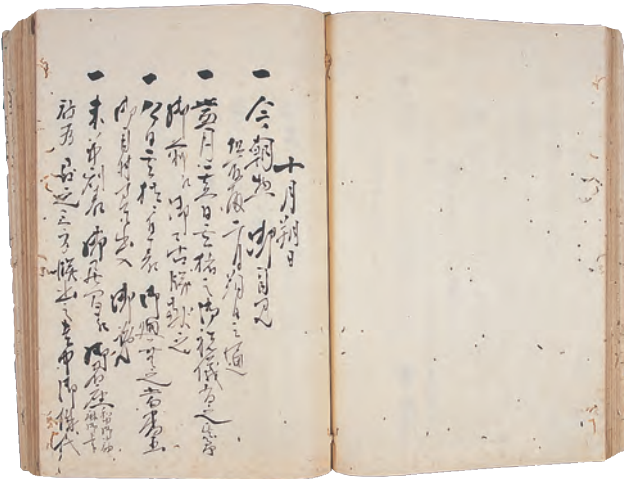
(図面 3)



(正月元日条 2)



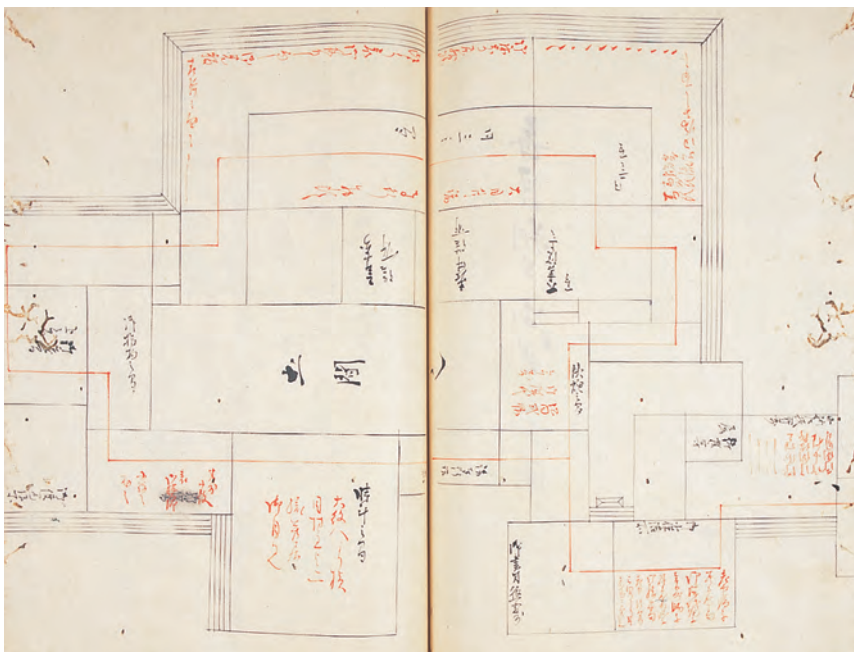
(正月元日条 1)



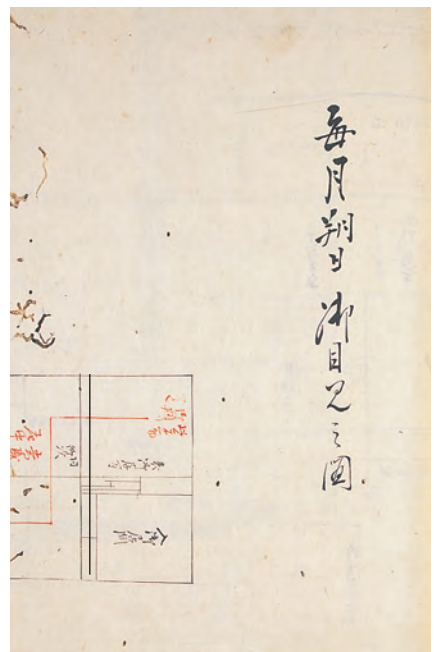
(十月初亥の日、玄猪の条)



(六月十六日、嘉祥の条)



(図面 2)



(図面 1)

このように本史料から、国元で行われた1年間の年中行事を具体的にうかがい知ることができます。

これら川越城中で行われた年中行事の特徴をまとめると、以下のようになります。

- ①正月元日から11日までに行事が集中している。
- ②五節句や朔日御礼等は、江戸城中で行われた幕府の行事と共通している。
- ③毎月14日以降は、寺社参詣が慣例化している。
- ④正月3日の謡初・同11日の具足飾り・同15日の左義長上覧・六月朔日の蔵の虫干し等、武家独自の行事の他に、上巳の節句・端午の節句・月見等一般的な行事も含まれている。
- ⑤朔日御目見時の各役職ごとの配置を示した図面等が含まれている。(図面1～3) この図面は、本史料の成立過程から、弘化3年に焼失した川越城二の丸御殿の平面図を描いていると考えられる。

特に②の中の年始参賀・八朔(8月朔日の惣登城)・嘉祥(嘉定)〔6月16日、菓子食して祝う行事〕・玄猪(10月初の亥の日に餅を食して祝う行事)は、江戸幕府で行われた年中行事の中の四大儀礼にあたり、重要な儀礼に位置づけられていたことが既に指摘されています。このような幕府にとって重要な四大儀礼を、徳川一門である松平大和守家は、国元の川越城中でも行っていたこと、つまり、在国中でも幕府の年中行事に準じた行事を行っていたことがわかります。

4. おわりに

本史料は、江戸時代末期に作成された写本です。しかし、奥書の「(略) 一日不可無此簿故、欲速成之写ニ以草ス、后日必欲命書役使謹書云」から、重要な史料と認識されて作成されたことがわかります。そのため本史料は、藩主の国元における年中行事をかなり正確に記していると考えられ、藩主在国中の年中行事の実態を知ることができる一事例として貴重な史料であるといえます。

また本史料にある図面は、現在のところ、弘化3年まで存在した川越城二の丸御殿を描いた唯一の平面図と考えられます。それ故本史料は、川越城二の丸御殿の様子を知る手がかりともなる貴重な史料といえます。

なお、今回は、紙面の都合で行事の概要のみを紹介しました。

(学芸担当 井口信久)

[注1] 曹洞宗孝顕寺は、寛永元年(1624)、松平大和守家初代直基によって建立されました。松平大和守家ゆかりの寺として、禄高150石を賜りました。川越藩時代は、城下の旧通町の川越街道沿い(現川越市通町)にありました。

[注2] 浄土宗森巖寺は、寛永5年(1628)、松平直基によって建立されました。松平大和守家ゆかりの寺として、禄高100石を賜りました。川越藩時代は、城下の旧西町(現川越市脇田町)にありました。

なお、森巖寺は、原資料では「巖」ではなく「岩」の字で記されているため、本文では「岩」に統一しました。

[注3] 日蓮宗永寿寺は、創建等の詳細は不明です。松平大和守家ゆかりの寺として、米50俵を賜りました。川越藩時代は、城下の旧堺町(現川越市六軒町2丁目)にありました。

[注4] 浄土真宗隆勝寺は、創建や川越藩時代の所在地は不明です。松平大和守家ゆかりの寺として、禄高5人扶持を賜りました。

[注5] 天台宗大興寺は、寛文7年(1667)、松平大和守家2代直矩によって建立されました。松平大和守家ゆかりの寺として、禄高200石を賜りました。川越藩時代は、城内帯曲輪の別当祈願所の隣にありました。(現川越市郭町2丁目)

寺院の所在地は、城下絵図等を基に確認しました。

【付記】

本史料の解説にあたり、佐藤啓子氏・林寿子氏の協力を得ました。ここに厚くお礼申し上げます。

【主な参考文献】

『前橋市史 第二巻』前橋市 1973

『川越市史 史料編近世I』川越市 1978

『川越市立図書館特殊文庫目録』川越市立図書館 1970

『武家儀礼格式の研究』二木謙一著 吉川弘文館 2003

『徳川盛世録』(東洋文庫496)市岡正一著 平凡社 2007

『江戸城』東京都江戸東京博物館 2007

分館だより

—川越城本丸御殿の屋根—

川越城本丸御殿の保存修理工事ははじまってから、約1年半が経ちました。建物は骨組みを残して解体され、現在は傷んだ部分を直しながら復元され、屋根の瓦葺きがほぼ完了しています。

さて、本丸御殿の巨大な屋根には瓦が何枚くらい使われているのでしょうか。答えは約2万枚です。今回の修理ではそのうちの約6千枚を新しいものに交換し、もともと使われていた古瓦のうち、使用できるものは再び屋根に上がりました。修理後、本丸御殿をご覧になった方は、新しい瓦はどこにあると思われることと思います。今回の修理で製作した新しい瓦は、古瓦と色合いや質感が異なるため、目に付くところに混在しないよう裏庭側の屋根を中心に配置しました。新しい瓦も次の修理を実施する頃には古瓦と同じような風合いになっていると思われるかもしれませんが、現段階で下から見上げてほとんどわからないと思います。

屋根の最上部の両端には巨大な鬼瓦が置かれています。建築当初、現在の本丸御殿は南側に「書院」と呼ばれた巨大な建物が接続されており(写真1)、鬼瓦は北側のみ置かれていました。しかし、明治初期に書院は解体され、残された建物の南側は刃物で垂直に切り落とされたようないわゆる「切妻」になってしまいました(写真2)。棟は書院の屋根に入れ込まれていたため、鬼瓦はなかったのです。書院が解体された後、残された建物は入間県庁や入間郡公会所といった公共施設として使用されますが、このとき解体された木材を使って付属する建物が建てられたり、切妻になった南側部分に手を加えて一つの独立した建物としての体裁を整えたと考えられます。今回の工事まで南側の鬼瓦として置かれていたものは、北側の鬼瓦とは全く異なるものでした(写真3)。色調や風合いは北側の鬼瓦と同じ江戸時代後期のものと考えられますが、デザインがまったく異なること

から、南側の鬼瓦は明治初期に解体された本丸御殿のどこかの建物に置かれていたものが転用された可能性が指摘されています。

今回の工事では、棟の両端で鬼瓦が異なることは外観的にバランスがよくないという判断で、北側鬼瓦の複製品を南側にも配置します。これによって、以前から指摘されていた南側鬼瓦の違和感がなくなると考えられます。もちろん、従前に使用されていた南側鬼瓦は保管し、展示などで皆さんにご覧いただけるようにします。

今回の保存修理工事によって、外観が大きく変わることはありません。これは本丸御殿が往時の姿を比較的良好に残しているからであり、外観を維持することも工事の重要なポイントになっています。その一方で、裏庭側の新しい瓦や南側の鬼瓦のように、細かく見ると工事による変更に気づかれる方もいらっしゃると思います。修理後のご来館の際にじっくり観察されることをお勧めします。

(教育普及担当
天ヶ嶋 岳)



写真2 昭和42年以前の本丸御殿南側屋根



写真3 解体前の南側鬼瓦



写真1 玄関・広間と書院の接続部(博物館模型)

第34回企画展

よみがえる河越館跡

国指定史跡河越館跡の発掘—その成果と課題

平成22年3月27日(土)～5月9日(日)

河越氏は、桓武平氏の流れを汲む秩父重頼が上戸の地に移り住み「河越」氏を名乗ったのに始まります。平安時代の末、京都の新日吉社に所領を寄進し荘官として力を蓄えるとともに、鎌倉時代には源頼朝の弟義経と姻戚関係を持ち、力を振るうようになります。また、南北朝時代には足利尊氏との関係も深く、相模国守護に抜擢されます。

川越市では、こうした河越氏の館跡である「国指定史跡河越館跡」を平成19年度から21年度にかけて整備し、平成21年11月15日に「国指定史跡河越館跡史跡公園」として開園しました。

この企画展は、河越氏に関わる資料・出土品の展示を通して、中世武士河越氏の足跡をたどり、「河越館跡史跡公園」を紹介いたします。

関連事業のお知らせ

・講演会 演題及び講師「中世東国の中の河越氏・河越館」東海大学講師 落合義明氏
日時 平成22年4月18日(日) 午後1時30分～3時30分

先着80名

・「国指定史跡河越館跡史跡公園」見学会

日時 平成22年4月25日(日) ①9時30分～②11時～ 現地集合

先着各20名

申込み：各事業とも平成22年3月30日(火) 午前9時～
電話・ファクスにて当館へ

利用の御案内

◆入館料

区分	博物館	川越市 蔵造り資料館	共通入館(観覧)券		
			●博物館 ●美術館	●博物館 ●蔵造り資料館 ●美術館	●博物館 ●蔵造り資料館 ●美術館 ●まつり会館
一般	200円 (160円)	100円 (80円)	300円	370円	600円
大学生 高校生	100円 (80円)	50円 (40円)	150円	180円	400円

※()内料金は、団体[20名以上、1名につき]の場合

◆開館時間 午前9時から午後5時まで(ただし入館は午後4時30分まで)

◆休館日 月曜日(休日の場合は翌日の火曜日)

第4金曜日(休日を除く)年末年始(12月28日～1月4日)

館内消毒(6月下旬)特別整理期間(12月下旬)

*開館時間・休館日は、博物館・川越市蔵造り資料館とも原則として同じ

(館内消毒・特別整理期間は博物館のみ休館、蔵造り資料館は1月2日から開館)

交通案内

東武東上線・JR川越線川越駅より
または西武新宿線本川越駅より、
・東武バスにて「蔵のまち経由」乗車札の辻バス
停下車徒歩8分、または「小江戸名所めぐり」
乗車博物館前バス停下車徒歩0分
・イーグルバスにて「小江戸巡回バス」乗車博物館・美術館前バス停下車徒歩0分
※御来館の際は、なるべく電車、バスを御利用ください。



川越城本丸御殿は保存修理のため、平成23年3月(予定)まで休館しています。

平成22年4月

日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	

5月

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30	31					

6月

日	月	火	水	木	金	土
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	

7月

日	月	火	水	木	金	土
						1
2	3	4	5	6	7	8
9	10	11	12	13	14	15
16	17	18	19	20	21	22
23	24	25	26	27	28	29
30	31					

8月

日	月	火	水	木	金	土
1	2	3	4	5	6	7
8	9	10	11	12	13	14
15	16	17	18	19	20	21
22	23	24	25	26	27	28
29	30	31				

※●印は、2館休館(博物館、蔵造り資料館)、●印は、1館休館(博物館)

発行日 平成22年3月20日

発行 川越市立博物館

〒350-0053 川越市郭町2丁目30番地1

TEL 049-222-5399 FAX 049-222-5396

Eメール hakuubutsukan@city.kawagoe.saitama.jp

ホームページ http://museum.city.kawagoe.saitama.jp/